

**<学会記録>17. 高齢社会における開業医の役割：  
訪問歯科診療を中心として(東日本歯学会第18回学  
術大会一般講演抄録)**

著者名(日)	山口 康, 管 武雄, 森戸 光彦, 新井 高
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	19
号	1
ページ	126
発行年	2000-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008512/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008512/</a>

びPGリセプターの発現を検討した。

(方法) 株化骨細胞MLO-Y4にシェアストレスをかけ、COX-2とPG receptorの発現量をRT-PCR法及びLight-Cyclerを用いて、またPGの合成はTLCを用いて比較、定

量した。

(結果) MLO-Y4細胞においてCOX-2, PG, およびPGE2 receptorの発現量はシェアストレスに反応して増加した。

## 17. 高齢社会における開業医の役割

### —訪問歯科診療を中心として—

○山口 康, 管 武雄\*, 森戸 光彦\*,  
新井 高\*\*

(山口医院歯科・鶴見大学歯学部高齢者歯科講座\*・北海道医療大学歯学部第二保存学講座\*\*)

介護保険のスタートを目前にして、我々歯科の役割も大きな変化の時期を迎えている。開業歯科医にとって、高齢者を取り巻く環境が変化してきており、歯科診療のニーズも変化している。特に「通院できない」患者層のニーズは重要な課題である。今回は訪問歯科診療を中心として、高齢社会における開業医の役割について報告した。

開業歯科医の役割は、外来診療を中心として成り立っているが、通院できない患者の増加により、往診より1歩踏み込んだ診療が求められるようになってきた。それが訪問歯科診療であると我々は考えている。すなわち、訪問診療は、外来、入院に次ぐ第3の歯科診療方針であると位置づけて考えられるのではないだろうか。

訪問診療の問題点と言える「設備」「人材」「時間」をどのように解決してゆけばよいのか。タイムスタティに

よって、1週間の訪問診療について、各ステップにどれだけの時間が費やされたか調査した。結果は、診療、移動に次いで訪問後の処理が10.4%、実時間で平均28分、訪問前準備に7.8%実時間平均21分を費やしていた。そこで、訪問診療の器材準備を効率化する目的で、(株)タケトラとティスポ製品の訪問診療パックを共同開発中である。

一方、歯科衛生士の役割の変化も重要であり、口腔ケアの専門家としての役割の拡大は今後期待され、在宅での訪問衛生指導、施設での口腔ケアおよびスタッフへの意識改革(指導業務)など、専門職としての歯科衛生士の業務拡大についても触れた。

今後も地域医療の発展維持に全力を尽くしつつ、大学とも連携を保ちながら歯科医療の発展に寄与したいと考えている。

## 18. 京都市における在宅歯科医療の現況報告

○畑山 佳之, 小枝 道子

(京都畑山歯科医院, 訪問口腔介護研究会京都市よみず会)

21世紀に向かって、高齢社会から超高齢社会に突入しようとしているが、京都府京都市においても人口の高齢化は急速に進み、実に5人に1人が65歳以上の老年人口にあたる事になる。必然的に高齢の有病者は増え、在宅歯科診療を希望する、所謂、寝たきり老人と呼ばれる患者が急増しているのが現状である。そこで、京都府歯科医師会では在宅歯科診療に対応するための研究会を設け、少しでも円滑な在宅診療が展開できるよう様々な講習会、勉強会を行っている。

我々研究会の方針として、患者からの依頼に対して、まず訪問を専門にしている歯科衛生士に訪問してもらい

(急性時は除く)、口腔アセスメントの制作にとりかかる。その際介護者と患者に口腔の衛生観念の徹底は勿論、患者の性格や介護者との関係、背景、家族構成も調査し、その患者や家族がいかに治療やブランクコントロールに協力してくれるか方策を練っていく。その上で、歯科医が訪問し、治療計画を立て、通常通りブランクコントロールと並行して治療を進めていくというような形態をとっている。その中で、我々が最も力をいれていることは、患者の気力をいかに充実させるか、歯科領域のみならず、全身的にも回復する意欲をもたせるよう、できるだけ十分なコミュニケーションをとるようにしている。